

高崎市文化財調査報告書第119集

上中居早道場遺跡

高崎市都市計画道路 駅東口線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報

平成4年

高崎市教育委員会

例 言

(1)本書は、平成3年度都市計画街路事業である国道354号道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要をまとめた略報である。

(2)発掘調査は、高崎市教育委員会文化振興課埋蔵文化財係が当たった。

〈事務局長〉石井忠明

〈調査担当〉久保崇博

星野守弘

(2)当該事業の所在地及び発掘調査の期間、面積は下記の通りである。

〈所在地〉高崎市上中野町字平道場、古
くさ
原敷

〈調査期間〉平成3年10月29日から

平成4年3月31日まで

〈調査面積〉797.28㎡

(4)当該教育委員会における記録番号は202である。

(5)出土遺物、図面等は当該教育委員会が保管している。

(6)本書の執筆、編集は、久保、星野が協議のもとに行い、遺物復元、トレス等は、執筆、編集担当者の指示のもとに、次の者が行った。

秋山正子、信沢百合子、別里美月、宮山かおる

(7)基準点測量は地外測量設計事務所、空中写真撮影は南青高館に委託して実施した。

目 次

例 言

目 次

序

第1章 経 緯

第1節 調査に至る経緯 …………… 2

第2節 遺跡の立地 …………… 2

1. 遺跡の地理的環境 …………… 2

2. 遺跡の歴史的環境 …………… 3

第2章 経 過

第1節 調査の概要 …………… 6

1. 調査の方法 …………… 6

2. 調査の経過（日誌抄） …………… 6

第2節 遺跡の概要 …………… 7

1. 標準土層の概要 …………… 7

2. 検出遺構の概要 …………… 9

写 真 図 版 …………… 11

序

平成3年、高崎市は第3次総合計画をスタートさせました。高崎市を、首都東京と日本海や太平洋を結ぶ「交流拠点都市」として建設し、北関東をリードする中核都市としての地位を確立することにより、21世紀の新しい都市の創造を目指しております。

当上中野地区におきましても都市計画街路事業の一環として駅東口線の一部建設が決まりました。全線完成の晩には、東毛へ通じる主要幹線として、人、物、文化の流れの更なる活発化が期待できます。

これらを実現するための開発は、しかし一方で、悠々の景観や、埋蔵文化財を破壊せねばならない事態を生んでいるのも事実であります。当地区におきましては、近接地で実施した発掘調査により、中世の居館址の存在が広く知られております。

こうした中において、高崎市における文化財保護行政は、市民のみならず、国民共有の財産である文化財の保護と、後世への継承を前提に、開発と文化財保護の調和のある解決策を模索し、実行の努力を続けているところであります。当該する開発事業につきましては、地元関係者を始め、関係部局間で協議を重ね、可能な限り文化財の破壊をくい止める手段を講じると共に、やむを得ず破壊される部分を対象に、事前の発掘調査を実施致しました。

発掘調査によって姿を現した、溝を主体とする遺構群は、周囲の遺跡を有機的に繋ぎ合わせる可能性を秘めており、先人達の土地利用の形態を知る上で極めて興味深い結果を得る事ができました。

本書は、調査結果の一部を収めた略報であります。

刊行にあたり、事業の円滑な遂行に御協力頂きました地元関係者並びに関係諸機関各位に厚く御礼申し上げますとともに、発掘調査及び整理作業に当たった担当職員と、これに協力、労苦を共にされた作業従業者の皆様への労をねぎらいたいと存じます。

平成4年

高崎市教育委員会

教育長 茂田治男

第1章 経緯

第1節 調査に至る経緯

わが国が高速交通時代を迎えてすでに久しい。特に本県は自動車の保有率が高く、自動車の普及と増大する交通量に翻え、幹線道路網の整備、拡充が求められている。

こうした中で高崎市は街路事業の一環として、環状線の東部とこれに交差する国道354号幹線バイパスの建設を決めた。

高崎市の主要幹線である環状線道路は、現在南東部を残してすでに供用され、活発に利用されている。一方、国道354号幹線バイパスは高崎駅東口より東へ通じる主要道路である。両者は上中町で交差する。双方とも生活、産業活動に欠かせないものとして、一日も早い全面的供用が待たれている。

このうち、国道354号幹線バイパス建設予定地は、昭和63年度の発掘調査で、反町歴史館と呼ばれる中世館址を発見した上中町近衛館遺跡が南東約130mに隣接するばかりでなく、遺物散布状況等からも、古墳時代を始め、近世、近代に至るまでの遺跡が複合的に存在することが予想できたため、地元関係者を始め本市の関係部局において、可能な限り遺跡を破壊から保護する事と、道路建設事業の円滑な施行とをめぐって協議、調整を重ね、やむを得ず破壊を受ける部分について発掘調査を実施し、記録保存を行うとの方針を立てた。

第2節 遺跡の立地

1. 遺跡の地理的環境

本遺跡の所在する高崎市上中町は、市街地中心部から東へ約2kmの位置にある。昨今の開発、新規開発の波は周辺にまで押し寄せ、その景観を大きく、急速に変えてつづめる。

高崎市は関東平野の西北部にあたり、北には赤城山、北西には浅間山、標名山等の山々を望む位置にある。市内北部に標名火山の南面する野影を形成する相馬ヶ原丘陵状地の尾端部の一部を含み、さらに南へ広く展開する丘陵・高崎台地と連絡される台地上に立地している。これらの山々を水源とする中小の河川が市内を北西から南東へと貫流している。

本遺跡の所在する上中町早瀬場及び西壁敷の南約3kmには鳥川が南東に水を選び、北方約3kmには井野川が南東流している。両者はほぼ平行して市内を流れ、遺跡地の南東約7km地点で合流し、鳥川は前橋台地と本庄台地とを二分しながらさらに南東に水を選び、利根川に合流している。

周辺の地形の傾斜は、巨視的に見ると、北西から南東方向に向かって緩やかに標高を下げているが、こうした傾斜に加えて、北西から南東にかけて発達した微高地とその南側に沿うよう

に、おむね平行する微高地とがある。微高地は南東方向に向かって延び、微高地北側は、築崎一矢(北)部一突崎一谷新田を兼ねる井野川の2段目段丘に連なり、南側は下中居一谷之崎一矢中南部方向を経て微妙に複雑な地形を形成しつつ谷貫野方面へと延びている。遺跡地の北側一帯は微高地上に営まれる集落地、南側は水田を中心とする耕作地である。本調査の原因となる道路建設予定地は、北西一南東方向に延びる地形を東一西によぎる位置関係にある。本調査区はこの微高地南端附近の傾斜地にあたると理解することができる。

2. 遺跡の歴史的環境

本遺跡周辺における縄文時代の遺跡の分布は、井野川中流域左岸における中期以降の熊野堂遺跡、八木箱田津遺跡、鳥川左岸では洪積台地上に立地する下佐野遺跡で中期全段にわたる集落跡、谷貫野方面等遺跡における住居跡の発掘調査例等が主で、県内に見られる丘陵地帯とは顕著ではない。大規模にして長期的に存続する集落地帯は丘陵地帯に高密度に認められており、当遺跡のように低地に移行する微高地縁部での発掘調査例は極めて少ない。

現在、本遺跡近隣で認められる最古の遺跡は弥生時代中期後半の鏡馬場遺跡で、本遺跡の約500m南西にあたり、低地を挟んだ南側の丘陵に乗っている。鳥川左岸段丘上にはこの他に、竜見町遺跡、上赤根遺跡、市遺跡などがある。近年、旧高崎城内の東門及びノ丸遺跡下層から、同期の土器を伴う方形周溝墓が検出されている。一方、井野川右岸では、小八木より続く舌状微高地の南端部の沢沢遺跡でも同時期の住居跡が検出されている。

弥生時代後期の遺跡は分布を広く、後期前期の複式土器を伴う焼失住居跡を発掘調査した正親寺遺跡、井野川右岸の上八幡北宅地遺跡では住居跡を検出、宿大瀬町の村西遺跡や方相寺遺跡では集落跡も検出されている。さらに下流域左岸には鈴ノ宮遺跡、元島名遺跡等がある。

また、両側に墓域、居住地を伴う低湿地帯に営まれた水田跡として著名な日高遺跡は、浅間山を給源とするC軽石に埋没しており、弥生時代後期の形態をとどめるものとして高く評価されている。他に、芦田貝戸遺跡、藤井宮遺跡、熊野堂遺跡、新保遺跡、西島遺跡、小八木遺跡などでも同テラに埋没した水田跡が検出されている。

弥生時代後期から古墳時代初期にかけて、古式土師器に代表される土器を出土する遺跡が分布する。新保遺跡、鈴ノ宮遺跡はその代表的な例であり、井野川流域右岸段丘上の矢中村東遺跡では前方後方型を含む周溝墓、上大瀬北宅地遺跡では車山様の土台を出土する方形周溝墓を発掘調査している。また、貝沢南側遺跡ではバレストライル系の土器を伴う方形周溝墓を発掘調査し、この地域の墓域としての存在を確認している。

正統元年銘の銅鏡を出土した築崎蟹沢古墳は、本遺跡と間を隔める微高地が南東に延び、旧大瀬村附近で分岐し、井野川の2段目段丘縁部に連なる微高地上の北端にある。蟹沢古墳の約1km

北西の柴崎呂田遺跡では阿蘇高地上から古墳時代の方形周溝墓を検出しており、この阿蘇高北側における、古墳時代の墓域としての存在が明らかになりつつある。近年、阿蘇高地上の柴崎村間遺跡では、S字変やバラス壺を始めとする古式土器を出土する上段が検出されている。

大規模な前方後円墳では、綿貫麓山古墳が南東約4.8kmに、正六浅間山古墳が南東約2.7kmに位置し、前方後方墳として著名な元島名特平塚古墳は約3.8km北東に位置している。

古墳時代の集落跡は、鈴ノ宮遺跡、綿貫遺跡などがある。また、住居跡を検出した柴崎遺跡群の一貫堀川右岸の堀地区は本遺跡に比較的近い地域における発掘調査例である。

この頃の水田跡は、芦田貝戸遺跡、御布呂遺跡、熊野堂遺跡、阿道遺跡、大八木富士廻り遺跡、並根北遺跡等で検出されているが、比較的市内北部に限られ、本遺跡の所在する中南部での検出例がない。

奈良、平安時代の遺跡には、柴崎西道跡や本遺跡の南東約2.5kmの矢中道跡群に含まれる天王前遺跡、村北遺跡、柴崎前遺跡の他、銅印「物部私印」を出土した村東遺跡がある。遺跡の分布範囲は沖積地にまで広がり、現況と一部近似する土地利用状況がうかがえる。また、浅間山噴出のB軽石（天仁元年＝1108年に比定される）に埋没した、条里制に基づくものと考えられる平安時代後期の地割をとどめる水田跡が多く、耕作遺構とそれを覆うテフラの広範囲な遺存は全国でも稀な存在である。岡久保遺跡は本遺跡の北東約500～600mにあり、本遺跡に接する微高地が北東側で接すると考えられる低地に営まれた水田跡ととらえることができる。また、柴崎遺跡群で検出した水田地帯は、岡久保遺跡と連続性の高い低地の東延長上にあり、矢中道跡群は1段高い河岸段丘上の低地部にある。

本遺跡の南東約1.5kmには下之城村東遺跡がある。倉賀野西条里と呼ばれる区域の一面で行われた発掘調査の結果、検出条里地割は現況とほぼ一致するとの結論を導き出している。検出された条里地割はさらに広範に展開した可能性があり、東は矢中、北は中居、西は上佐野、岩押に及び、本遺跡南側で北東から南東に延びる低地にも及んでいた可能性が大きい。

本遺跡北側で南東に延びる微高地上には反町屋敷と呼ばれる中世居館跡が、一部現在まで堀の姿をとどめていた。その一面が上中居辻築師遺跡として発掘調査され、複郭式居館跡であることが確認されている。この居館跡は本遺跡の南東約150mにあたる。

中世の城館跡は本遺跡北東約1.5kmの大類城址があり、和田城の支城でありながらも多種の郭を配した予想外に大規模なものであったことが発掘調査で明らかとなった。同じ和田城の支城の一翼で、永禄11年和正盛の築城とされる下之城址が本遺跡の南南東約1.5kmにあり、南東に延びる低地にその北限を接して占地している。四方向連郭構造の城館は、往時には本遺跡からも、流るものとなし耕作地帯の奥に望むことができたであろうことが想像される。

概観したごとく、本発掘調査は、北西から南東に低地と微高地が帯状に発達した地形と歴史

的環境のもとに展開した、溝路を主とする遺構群の一部を検出した形となった。溝は調査区内を通過し、一遺跡内で完結しない。が故に、周囲に道路の存在が推測でき、それらを繋ぐものとしての評価が成り立ち得よう。今後の周辺における発掘調査結果と合わせ、すでに発掘調査されている水田遺構等における灌漑施設との関係を考察する一要素に加えることもできよう。

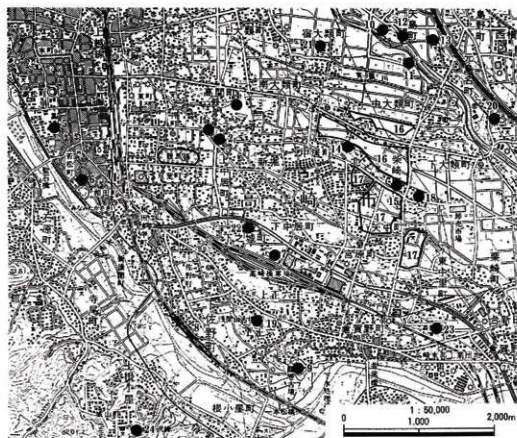


図1 周辺の遺跡地図

- | | | |
|--------------|-------------|--------------|
| 1. 上中居早道場遺跡 | 9. 倉賀野万福寺遺跡 | 17. 矢中道跡群 |
| 2. 上中居辻築師遺跡 | 10. 宿大類村西遺跡 | 18. 蟹沢古墳址 |
| 3. 鏡馬場遺跡 | 11. 万相寺遺跡 | 19. 浅間山古墳 |
| 4. 岡久保遺跡 | 12. 鈴ノ宮遺跡 | 20. 元島名特平塚古墳 |
| 5. 東門及び三ノ九遺跡 | 13. 元島名遺跡 | 21. 大類城址 |
| 6. 竜見町遺跡 | 14. 西浦遺跡 | 22. 下之城址 |
| 7. 下之城村東遺跡 | 15. 柴崎村間遺跡 | 23. 倉賀野西条里 |
| 8. 下佐野遺跡 | 16. 柴崎遺跡群 | 24. 金井沢碑 |

第2章 経 過

第1節 調査の概要

1. 調査の方法

調査は、対象地内数箇所に設けた試掘坑により基本土層の略略を把握。対象地の全面発掘を理想としつつも調査期間の厳守を大前提に、対応可能な面積に絞り、調査区設定計画を立てた。

これをもとに、当初、大型重機で東西方向、南北方向にトレンチ掘削を行い、後に遺構の遺存状況に応じて拡張した結果、開発工事対象地内中央附近北寄りに、約9.1m、45.1m、21.4m、45.5mで4辺を構成する方形の区画に、当初のトレンチの残欠が付随する調査区となった。

遺構の検出は、現地表下約50cmにある暗褐色土面を遺構確認可能な段上面と判断し、新しい盛り土、耕作土を大型重機で掘削した。

遺構実測用の基準点は、国土座標第Ⅲ系内の4点を選定し、杭打ちを委託、実測段階で必要に応じて細分化して使用した。標高は91.912mを基準とした。これらをもとに、実測は、平面図は元の平板測量、セクション、エレベーションは $\frac{1}{50}$ で行った。

記録写真は35mmモノクロームとカラーリバーサルを併用して撮影。空中写真は6×6モノクロームと35mmカラーリバーサルカメラ搭載のバルーンを用いての撮影を、委託により実施した。

2. 調査の経過（日誌抄）

1991年10月29日(火)	調査期間等、発掘調査に関して街路課と協議。現地踏査。調査区設定。
30日(水)	本日より、重機による表土掘削開始。遺構確認面は表土下約50cmの暗褐色土下とする。
11月2日(土)	水道管が破れ、調査区が冠水する。
6日(水)	本日を以って重機による表土掘削作業終了。
11日(月)	人手による遺構確認作業を開始する。調査区を横断する形で大型水路(7号溝)を検出する。
15日(金)	7号溝発掘開始。掘り込みが深いため、湧水に見舞われ作業が難航する。
18日(月)	基準点・水準点測量及び杭打ちに着手。
29日(金)	4号井戸発掘開始。
12月6日(金)	4号井戸より曲物を始めとして遺物が出土する。
13日(金)	7号溝完掘。
21日(土)	バルーンを用いての調査区全景の空中写真撮影を実施する。
27日(金)	本日を以って発掘調査終了。

以後、断続的に整理作業を行うと同時に、報告書作成作業に入る。

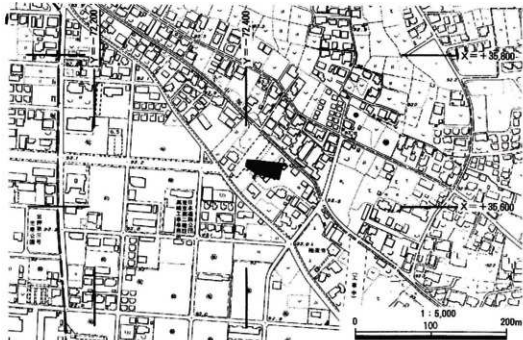
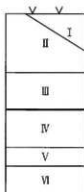


図2 調査区配置図

第2節 遺跡の概要

1. 標準土層の概要

開発ローム層が、調査区北東側においては比較的粒が細かく、オレンジがかった黄褐色であるのに対し、南西側では粒子が若干粗い不均一なシルト混じりで、白色がかった黄褐色を呈するなど、地点により、若干の違いが見られる。本調査区における標準層の層序を以下に示す。



- 第Ⅰ層・現表土。旧耕作土上に施された現代の盛り土。
- 第Ⅱ層・灰茶褐色土。耕作土。新しい盛り土のない場所では、本層が表土を成す。多量の浅間山A軽石及び少量のB軽石を含んでいる。
- 第Ⅲ層・暗灰色土。暗褐色土中に少量のA軽石及びやや多量のB軽石が混在する。B軽石が層内に比較的に混在するのに対し、A軽石は地点により種々の層がある。
- 第Ⅳ層・暗褐色土。比較的粒の細かい暗褐色土が主体。少量の白色の粒子及びローム粒子が混在し、水気が多いと黒色、乾燥すると褐色に発色。本層上面が遺構確認面。
- 第Ⅴ層・黄茶褐色土。ローム層移層。暗褐色土中に多量の黄褐色細粒が比較的に混在し、黄白色の粒子(細粒一約2ミリ大)が少数量混在。粘りがある。
- 第Ⅵ層・開発ローム層。粒子が比較的粗く、不均一で、シルトが混入している。若干固結しているが、層上面はむしろ、粘り強くでブロック状に欠落する。地点により、比較的粒が粗く、粘りが強く、ややオレンジがかった黄褐色を呈する。

図3 標準土層層序図

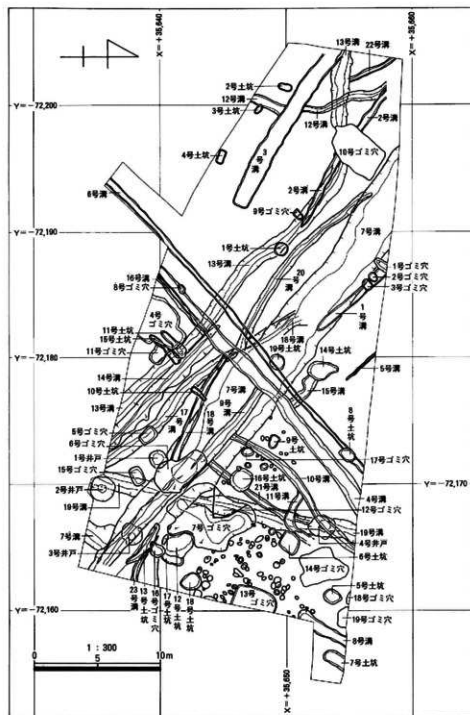


図3 遺構配置図

2. 検出遺構の概要

今回の発掘調査における全検出遺構は次のとおりである。

(1) 溝跡・23条、(2) 井戸跡・4基、(3) 土坑・19基、(4) 柱穴跡・85本、(5) 竈跡・10箇所。

以下、溝跡及び井戸跡の概要を列記する。

(1) 溝跡

- 1号溝跡・出土位置：X=+35,652.4、Y=-72,182.1~X=+35,657、Y=-72,186.7地点。出土遺物なし。
- 2号溝跡・出土位置：X=+35,657.9、Y=-72,200.8~X=+35,651.2、Y=-72,190.2地点。出土遺物：土師器坏口縁1点。
- 3号溝跡・出土位置：X=+35,653.7、Y=-72,203.7~X=+35,646.5、Y=-72,191.9地点。出土遺物：土師器坏3点。
- 4号溝跡・出土位置：X=+35,639.8、Y=-72,186.6~X=+35,655.8、Y=-72,168.5地点。出土遺物：土師器4点。近世陶磁器9点。瓦4点。石器1点。石(石英)2点。
- 5号溝跡・出土位置：X=+35,657、Y=-72,180.2~X=+35,654.7、Y=-72,178.2地点。出土遺物なし。
- 6号溝跡・出土位置：X=+35,635.8、Y=-72,893.8~X=+35,656.1、Y=-72,171.1地点。出土遺物：土師器2点。
- 7号溝跡・出土位置：X=+35,638.5、Y=-72,193~X=+35,636.5、Y=-72,164.7地点。出土遺物：土師器30点。須恵器4点。灰輪陶器1点。近世陶器1点。
- 8号溝跡・出土位置：X=+35,654.6、Y=-72,157.4~X=+35,651、Y=-72,159.8地点。出土遺物なし。
- 9号溝跡・出土位置：X=+35,648、Y=-72,177.5~X=+35,635.5、Y=-72,163.6地点。出土遺物：土師器1点。軟質陶器7点。近世陶磁器14点。近世土器1点。木片1点。
- 10号溝跡・出土位置：X=+35,645.8、Y=-72,173.8~X=+35,655.4、Y=-72,164.8地点。出土遺物：近世陶器4点。
- 11号溝跡・出土位置：X=+35,651.2、Y=-72,169.2~X=+35,650.2、Y=-72,167~X=+35,651.6、Y=-72,165.6地点。出土遺物なし。
- 12号溝跡・出土位置：X=+35,647.4、Y=-72,200.4~X=+35,657.9、Y=-72,201.3地点。出土遺物なし。
- 13号溝跡・出土位置：X=+35,654.8、Y=-72,204~X=+35,636.9、Y=-72,176地点。出土遺物：土師器1点。須恵器1点。近世磁器1点。炭化物1点。

14, 14号溝跡・出土位置: $X = +35,644.6$ 、 $Y = -72,182.3 \sim X = +35,636.1$ 、 $Y = -72,173.7$
 地点。出土遺物: 土師器 6 点。軟質陶器 5 点。近世陶磁器 9 点。金銅片 1 点。木片 2 点。石
 (石英) 1 点。

15, 15号溝跡・出土位置: $X = +35,652$ 、 $Y = -72,178.3 \sim X = +35,650.2$ 、 $Y = -72,176.2$ 地
 点。出土遺物なし。

16, 16号溝跡・出土位置: $X = -35,639.7$ 、 $Y = -72,186.2 \sim X = -35,643.5$ 、 $Y = -72,181.8$
 $\sim X = +35,641.2$ 、 $Y = -72,179.5$ 地点。出土遺物: 土師器 1 点。近世陶器 1 点。

17, 17号溝跡・出土位置: $X = +35,650.6$ 、 $Y = -72,183.6 \sim X = +35,635.7$ 、 $Y = -72,172$ 地
 点。出土遺物: 土師器 4 点。

18, 18号溝跡・出土位置: $X = +35,651.2$ 、 $Y = -72,183.2 \sim X = +35,641.1$ 、 $Y = -72,171.7$
 地点。出土遺物なし。

19, 19号溝跡・出土位置: $X = +35,655.5$ 、 $Y = -72,166 \sim X = +35,634.7$ 、 $Y = -72,170.6$ 地
 点。出土遺物: 土師器 25 点。

20, 20号溝跡・出土位置: $X = +35,656.4$ 、 $Y = -72,192.8 \sim X = +35,641.4$ 、 $Y = -72,172.7$
 地点。出土遺物: 土師器 2 点。

21, 21号溝跡・出土位置: $X = +35,651.8$ 、 $Y = -72,167 \sim X = +35,643.8$ 、 $Y = -72,171.8$ 地
 点。出土遺物なし。

22, 22号溝跡・出土位置: $X = +35,658.4$ 、 $Y = -72,203.2 \sim X = +35,655$ 、 $Y = -72,201.8$ 地
 点。出土遺物なし。

23, 23号溝跡・出土位置: $X = +35,639.2$ 、 $Y = -72,166 \sim X = +35,637.8$ 、 $Y = -72,162.4$ 地
 点。出土遺物なし。

(2) 井戸跡

1, 1号井戸跡・出土位置: $X = +35,639.8$ 、 $Y = -72,172$ 地点。出土遺物: 近世陶磁器 6 点。
 2, 2号井戸跡・出土位置: $X = +35,635.4$ 、 $Y = -72,169.6$ 地点。出土遺物: 土師器 4 点。須
 恵器 1 点。軟質陶器 6 点。近世陶磁器 8 点。瓦 1 点。

3, 3号井戸跡・出土位置: $X = +35,637.6$ 、 $Y = -72,165.9$ 地点。出土遺物なし。

4, 4号井戸跡・出土位置: $X = +35,653$ 、 $Y = -72,166.7$ 地点。出土遺物: 軟質陶器 4 点。近
 世陶磁器 3 点。木製品 (歯物) 2 点。



調査区全景 (東から)



調査区全景（上が北）



発掘作業風景（東から）



7号溝跡遺物出土状況（南東から）



4号井戸跡全景（東から）



4号井戸跡遺物出土状況（上が西）

高崎市文化財調査報告書 第119集

上中居早道場遺跡

平成4年3月 印刷

平成4年3月 発行

編集 高崎市教育委員会

発行 高崎市教育委員会

印刷 湘精真社印刷所

